第 2 回『関西建築家新人賞』 審査講評

今回、審査委員長の大役を務めることになった、これはこれまで関西建築家大賞受賞者が新人賞の審査委員長を引き受 けるとのことが建築賞分科会で決定され、自動的にその役割が回ってきた。他の二人の審査委員については建築家以外の専門家に参加いただいている、これは開かれたあり方で建築の価値観を共有できればとの選択である。一人は哲学者であり大阪大学副学長の鷲田清一氏、もう一人は美術評論家であり国立国際美術館長である建畠哲氏にお願いした。お二人には建築家の視点以外の立場から新人賞にふさわしい選定の役割を担っていただいたが、両名とも高い教養以上に建築に対する深い造詣を有しておられることも依頼の理由の一つである。私の役割は建築における新たな可能性を発見することに務め、建築家協会が標榜する理念を前提とし、とくに新人賞にふさわしいことを念頭に審査にあたった。

新人賞とは年齢で縛れるものではないと思うが、この賞は 45 歳を起算点にしている。この年齢において何を構想しどう考え、そして判断、実現したかが重要であると考えた。結果として、ここに求められるのはオリジナリティーではないかと考え、審査の手がかりとした。しかし、建築審査における判断材料として平面計画性・空間性・造形性・建築技術など多々あるが、雑誌やネットなど情報が氾濫する現在においてオリジナリティーなどあるのだろうかと疑問も無くはない。そこで手がかりは「あこがれ」にあるのではないかと審査を行いながら感じた。それは審査経過の中で「あこがれ」と言う心の動きを建畠さん鷲田さんと話し合ったことが記憶に強いからである。あこがれは対象への価値の共有、つまりコピーを誘発し、やがてそのコピーを克服する心の動きの核となるものと考える。この気分を有していることが新人賞としての重要な一点であるとして審査の指標となった。

第 2 回の関西建築家新人賞には今回 13 作品の応募があり、書類審査の結果 4 作品の現地審査を決定した。書類審査では各審査委員が 3 票を持ち、2 回の投票を行い 6 作品が残った。この後、合議を行い相互に意見を出し合った結果 4 作品に絞られ、これを現地審査対象とすることを決定した。現地審査は滋賀・京都・大阪・兵庫と縦断し 4 作品の内外を確認し、そのあと最終選考の場を持ち最大 3 作品を前提として議論を重ねた。2 作品については早い段階で合意選定となり、残り 2 作品について議論を重ねた結果、次作に期待することとなった。

受賞作品

錦綾幼稚園

審査委員の全員が我が子をこの幼稚園に通わせたいと感想を述べたが、これは過大な評価ではなく選択肢としての現状の幼稚園の問題点である。大きな樹木に覆われるお寺の広い境内の中に、開放的な空間を感じさせる分散配置でバランスよく実現している。各保育室を開放廊下で接続し、浮遊間のある屋根を重ねることでより一体感を作り出している。また、現地でも施主や父兄を交えた地道で持続的な会話の様子が感じられたことを高く評価した。断面方向に対する関心の比重が少ないのか、軒の出と高さのバランスなど開放する開口部の抑揚に更なる研鑽を期待したい。

SETRE Chapel

結婚式場は象徴性を目的とし単一機能としての単純さを持つ反面、精神性にかかわる空間性を求められる。内部空間では瀬戸内大橋を大きな全面開口部により切り取り風景として限定することで、刻々と移り変わる太陽光の変化を最大限に生かしている。要素を単純化することで空間の強さを獲得し、必要な象徴化を生み出している。外壁については微妙な表情を意識したのか、目的を持たない装飾に感じられるところは惜しい。饒舌さを押さえることが器用に流されることを防いでくれる、更なる飛躍を期待したい。

次点 2 作品について

スリットの家

スリットを通して入る光と陰は魅力的な空間をつくり、細長い敷地の特性を生かし前後から出入りできる動線計画も有効であったが住宅としての質が稀薄に感じられた。スリットで演出された廊下の存在感が大きいが故に、日常性生活を守ろうとしたのか常識的な解決になってしまっているのが残念であった。　大胆な空間造形と日常的機能や質との融合が計られることを次作に期待したい。

ムギカライエ

木造の都市型住宅であるが、周辺環境に対しバランスの良いたたずまいを実現していた。小さな敷地の住宅にとってなやましい車庫を上手く処理している。交通量の多い全面道路に対しては、格子による通風と若干の採光を確保し、開放されたトップライトから自然の光と風が引込まれ魅力的な空間となっていた。　しかし、比較的大きな断面の木造軸組に力強さがなく、反面開口部などのガラス枠との関係に繊細さを欠いている部分が惜しいところである。内部に開放的な空間を実現する階段回りの手腕は次作を期待させるに十分である。

審査委員長　遠藤　秀平

一日がかりで、滋賀、京都、大阪、神戸の候補作を見て回るというハード・スケジュールだが、実に貴重な経験ではあった。用途も立地条件も規模もまったく異なる建築を一律の基準で判断するわけにはいかず、相互に比較検討するのはなかなか難しい作業ではあったが、最終的には異論なく二件を選出することができた。

小笠原絵理の「錦綾幼稚園」は、園庭を囲むように配された八つの教室を片流れの大屋根の下に収めたもので、どの教室にも開放感があり、扉を開け放てば廊下や中庭と半ば一体的な空間になるように配慮されている。桜の古木などの樹木の取り込み方もうまく計算されている。中間領域の設け方が自然で、園児たちにとって居心地の良い場所があちこちに見出せるといってもよい。独立した教室という条件を満たしながらも閉鎖性をまったく感じさせない設計は、高く評価されるべきだろう。休みの日で園児たちの姿はなかったが、このような空間で幼児期を過ごせるのは彼らの生育に得難い影響を与えるに違いない。橋の造作がやや気にはなったが、理念先行ではない建築の健やかさが快く受け取られた。

芦澤竜一の「SETRE Chapel」は、まったく対照的に空間を直截に切り取り、光景を発生させる先鋭な装置としての建築である。もちろん瀬戸内海と明石海峡大橋とを前にするというロケーションに恵まれているからこその試みだが、実のところその素晴らしい“外部”は与件というよりも徹底したミニマルな構造と全面ガラスの開口部によって、人為的に生み出されているかのようにさえ思われるのだ。禁欲的な方法論が、表現の大胆な恣意性に結び付いているといってもよい。白い壁と鏡のように外光を反射する床も、その臆面もないフィクションに美しく加担している。私たちが訪れたのは夕方だったが、日が高い時刻には、また別のフィクションが姿を見せているのであろう。外壁は宙空に浮いたような箱の存在感をニュートラルにするためか、逆に柔らかなトーンの塗装で仕上げられている。デリケートな計算とも言えるが、個人的にはボリューム感をストレートに示した方が、このチャペルの非現実性をよりモニュメンタルなものにしえたのではないかとも思う。ともあれ、異空間を演出するセンシビリティーと造形的な力量を強く印象づける建築ではあった。

審査員　建畠　哲

ひとはなぜ空間をなぜデザインしようとするのか。おそらくそれは、何かの訪れを待ちこがれるためである。人びとを、自然を支配するがために、空間を設計するということはもちろんある。が、それが遺跡という以外に生き延びたためしはない。ほんとうに生きた空間というのは、人びとのあいだの関係が、あるいは人と自然との関係が、設計者の思いからときに逸れても、いつもいきいきと展開し、生成している、きわめて動的なものであろうとおもう。そしてその意味で、存分に「開かれた」ものであろうとおもう。

小笠原絵理の「錦綾幼稚園」は、子どもたちの感受性がのびのびと躍動するための空間をデザインしている。屋根と壁を支える構造が別になっているので、室内は屋根と壁によって閉じられることなく、その二つの構造の隙間が世界への通路となっている。一日の空の表情の変化、季節ごとの樹々の佇まいの変化が、子どもたちの眼の端にいつも映しだされる。だだっぴろい縁側は、隣の組との、あるいは室内と外界との接点を、仕切りとしてではなく、交通の場所として子どもたちをのびやかに迎える。床の暖房が、壁の肌理が、子どもたちをふんわり包む。だから安心して、風雨を顔にやんちゃに浴びることもできる。壁に塞がれることなくのびのび動き回ることもできれば、居ずまいを正して、内向きに集中することもできる。子どもが移動するとき、空間にさまざまの微妙な高さの変化があるのもいい。子どもたちが住んでいるであろうマンションとは正反対の空間を、一日の半分、体験させる工夫にも、建築家の濃やかで鋭い批評的な感覚が込められている。大人たちが日々の大半を過ごすオフィスを、この幼稚園の発想でリデザインする仕事を、建築家・小笠原の次の仕事として期待したい。

芦澤竜一の「SETRE Chapel」は、一日そこに座してその空間を味わいたいと思わせる建造物である。束の間の「見学」でも、儀式としてのウェディングででも、この空間は味わいつくせない。なぜなら、この空間はその向こうに拡がる自然の空間をどう受けとめるかに懸かっているから。一日のさまざまな陽射しにどう応えるか、海の荒々しい表情の変化にどう応えるか、あえて視界に入れた人工的な大橋の、非日常の、しかしやや無粋な佇まいにどう応接するか……。それはひぐらしこの空間に居続けてはじめて見えてくることであろう。巨大なガラス窓の向こうに展開する光の舞を感じながら、外から射し込む光を反射させる床の表情を足もとで感じながら。透明と反射という光の戯れ。その前に禅の僧でもないのにひぐらし座するというのは、たしかに最初は快楽でもやがて苦痛に裏返ってしまうだろう。とすれば、粋な音楽演奏でも愉しんでいたい。逆光のなかに浮かぶミュージシャンの影をリズムの像として眺めながら。剛健な造りなのに、外壁は靄のように柔らかい。

そのほかにも、コンセプトにぐいっと惹かれた作品もあったが、感覚を（逆説的ながら）隙なくほどくという、ぎりぎりのバランスを実現していたのは、この二作品だとおもう。

審査員　鷲田　清一